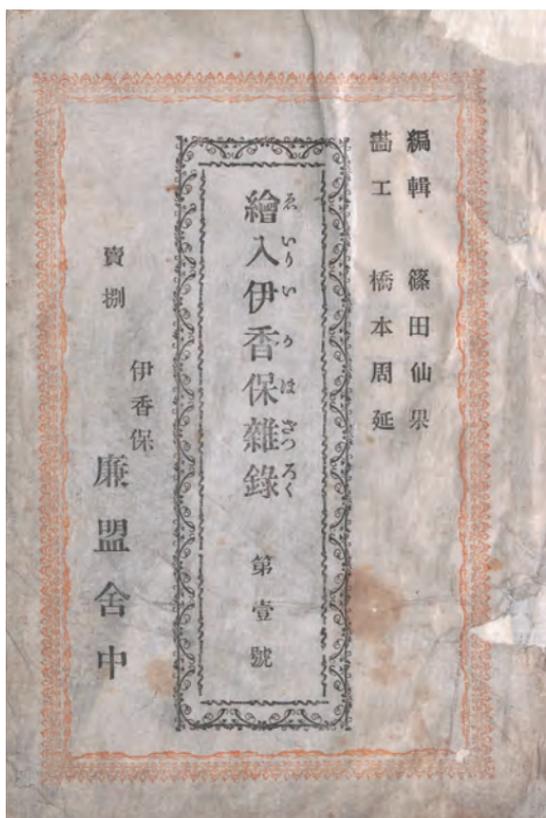


繪入伊香保雜錄 第1号

復刊版



群馬地域文化振興会

繪ゑ入いり伊い香か保ほ雜ざつ錄ろく

第壹號

緒言

○伊香保の往古より高名の地也、古風を存し、奇事異聞有り、雖數回の火災によりて書類のこどくく烏有とされ、バ古老の口碑、ふる話説の内、最確説を登録し、亦に記者見聞に隨がひ筆記すよつて号を次くべし。

○伊香保近傍にて未だ江湖に知られざる名所、舊跡、古碑、古器物、或は奇人の小傳も記載を

伊香保雜錄第壹号

紅葉庵主 篠田仙果誌

○明治十二年七月中旬 皇太后宮 伊香保温泉へ行啓られし際 澁川驛より里程一里餘 字一本松の許に御野立あり 供奉せられし皇太后宮太輔万里小路博房卿鬱蒼たる古松と題としく

芝中の松のやどりに千世かけて

のこるの君の御蔭ありけり

ト詠じたまふ依て一本松を 御蔭松と改稱履歴の文と當

縣令撰れたり

是歳己卯 皇太后宮行啓於伊香保之温泉七月十七日

車駕發京往返由此道時屬盛夏掃松下以休 車駕矣既而土

人建石命松曰御蔭請博房卿之詠屬余書題額博房卿以本官
從駕余則管地方卿之詠余之題皆不可辭者碑成矣併記其事
於碑陰亦出土人之意云

明治十二年秋九月 群馬縣令楫取素彥撰並書

博房卿の詠歌楫取君の文とも石に刻して松の許に建られ
つ且貴顯方より賜りし和歌の

芝中の御かけの松やちよかけて

君かみゆきに逢むとすらむ

三條實美卿

道のへよ生たる松も時を得く

みかけとあふく世よりあひに死

従一位忠照卿

世と共お榮えくしてとしふとモ

まかけの松よけふをわするあ

正二位建通卿

かきりあくさかえ行らむ松蔭を

思へり君かまかけかりけり
高崎正風

よろつ代にその名くちめやこの松の

よひひり千世のかきりありども
美清

とこしへに君かめくみの蔭そへて

あふくもたかき嶺のまつ
香禊

我君のみかけおよりてふく山の

松も世おこそあらはきよなり
契之

日の御影御名かみのふりて芝中の
八十二齡

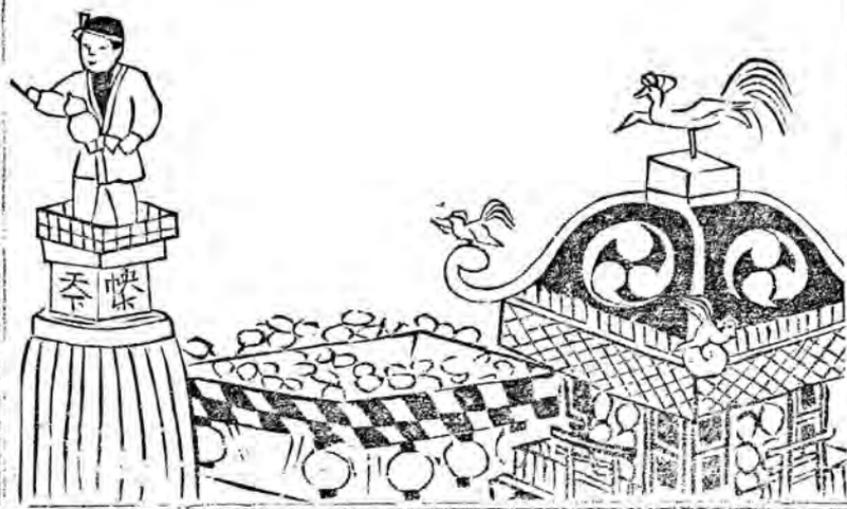
松も雲井の敷ゝ入るらん
勇名

御蔭松の碑たもとの落成たもとをほき奉りて

さとの名いよもに榮えて芝中の

まつもまをく御幸またなむ
貞歎

○示時明治十四年十月十九日
 (例祭本日)の九月十九日
 むれども延せし也) 縣社伊
 香保神社祭禮あり祭主の祠
 掌堀口貞敬副祭主同宮下知
 義拔主同狩野利房典禮の祠
 官高山茂樹の諸氏にて正午
 樂と奏し献儀の式あり次は
 祭主祝詞をあげて群馬縣令
 楫取君○石川三等警部○坂
 西六等警部○郡書記後藤善
 十郎の諸君參拜の式あり畢



りて神輿を下の街の仮屋よ
 渡御す路次樂を奏し静々徐々
 々として雑沓せず村内の戸
 主の羽織袴にて神輿に随ふ
 數種の笠鉾の順次お操り出
 し囃臺の内より大太鼓小太
 鼓笛を合して古風の囃子を
 かせり神輿仮屋に移しれば
 再献供の式をなし翌二十日
 正午神輿を伊香保の社に納
 め祭式全く畢この祭りの一
 時の莊觀みして浴客いかは



話説の第一等どなそも宜也
 ○同社境内に俳士ばせを翁
 の碑あり

表面

初時雨猿も小篋を

ほし夕あり 芭蕉翁

裏面

てきのほし張程

つゝわ時雨傘 白虎園 宗瑞

のつそりと月の

見て居時雨哉 白眼堂 雪才

安永七 戊戌初冬雪才建之

